和門
文部
人31號
五冊
3

國語
4L
124
3

春色連理梅第三編上帙

[112575]
国語

そこぐらむり
陽岡山若き者
くらせり
こころ
その
ろ
こ
うきそ
身を沈めの
そのちあ
ずに。
ゆ
ま
ま
ま

めて　みつ

おの東西
こもろのさんけの　もろ
里波こ征久一種み
いおう　ふるる
汪鄙比春手そ。梅　もと
もぐらざる　おとこ　もぐら
父兵棚の土泥原。男ハ
つきうげ　むら　まぐき
月落を海に向ふ机ふ
ちよ　おとめ　おとこ
裸百四ろ。水澗
ちる　さまざま
相雁一も　ふるる
八二言ある高峯の古淵
きこもち　みろ　こころ　もろ
又征あり
やぶ
鳥

もゝ柏ちぢの
ちぢのやしろ
猛虎
南〳〵子
うのろんもゝ
子ねこ
ひとり
地面に書
乃
柏
ひとり
るゞ
ゞきよ
もゞのそう
とも
つき

もゝ柏ちぢの
ちぢのやしろ
猛虎
南〳〵子
うのろんもゝ
子ねこ
ひとり
地面に書
乃
柏
ひとり
るゞ
ゞきよ
もゞのそう
とも
つき

よびぎぬもぎ
ちぢのやしろ
猛虎
南〳〵子
うのろんもゝ
子ねこ
ひとり
地面に書
乃
柏
ひとり
るゞ
ゞきよ
もゞのそう
とも
つき

よびぎぬもぎ
ちぢのやしろ
猛虎
南〳〵子
うのろんもゝ
子ねこ
ひとり
地面に書
乃
柏
ひとり
るゞ
ゞきよ
もゞのそう
とも
つき

秋郊文庫



小モ相呼起問
春階前草色上
羅裙玉釵分半墮
無聊頼欲倩牙
纖理乱雲
華笠翁



○孫康雪を積み車胤螢を聚めて学ぶ

冬の雪夏の螢も遊ぶ人こそあるべき時なるを

おまえやうまう文字を

よみとき

さくい

他言ふな

をこと

習の行

女子のおるで

つ

兄やさ

むま

女

お

由岐



梅暮里谷峨女述

○雅平朝臣（むねひら）

えうそくの
ちぎさを
は吟（さが）なく
おるご
婦人（ふじん）とげ
（とり）あり
ゐる
ながめ
ふくろふも
なく
花の
うへ
白（しら）ゐとせ柳（やなぎ）の
まゆ
眠（ねぶ）りてゐる

まし
げ
その姿（すがた）敷（しき）の実（み）
敵（てき）敷（しき）腹（はら）ふ（ぶ）
抱（うれ）ろ柳（やなぎ）ろ足（あし）もさぞ
（ろう）も
美少年（びしょうねん）

（ろう）ど
房（ふさ）二（に）帝（てい）

梅蓑里
谷二述


東屋の
かけ
硯庵
梅青
子
拾

毛谷色連理梅巻之七

江戸　鈴亭梅暮里谷峨作

利郎文庫

あるヨ　き
又　きく「ヲヽ
ソレすぎまつ
ハテ
ナニ
ソウ
然ろそんなら
ヲヤ　とだこがん
早く　行度そうだ
おがん
ソレ
ソレ
ソレ

ひふ流ともふ「良いさ
ぐ 朝もあの娘 ふたり
朝もあの娘 ふたり
やさしく きこえ
ふの風情 ふたり
又迫 日ふおおそ
ふさ 房さんの安名
房さん ふさんの母よ
ねまさ ちゃん
在ところ 来ひもの
いもおもあき
ふたり
あの ふたり
きこえ
ふたり ふたり
あん
きくそんな
きなさる
きう
まくまく
ふさ
ねまさ
ちゃん
ちゃん
ちゃん

ちッとも
かまわず抱しめて居てお呉れ
なさるのが
おとこ
男がいくらものろまでも是
きく
位のそそっかしやは
ちんぼつ
珍物
おもひまわ
思ひ廻しの又通ぢ
きのが
ぎり
義理ぢゃ
ひまん
暇
せけん
世間
なり
成
と
と
ひまん
暇
せけん
世間
と
と

ぢうろん　何ぼ　きんじょ知でぢんもの
きく　ぢうろん　せけん　くち
ぢうろんでしゃ　私ふぜんる　あまの
ぢうろん　まこと　くち　ぢうろん男のおこと
ぢうろんでしゃ　そのぜんる　あまの
ぢうろんでしゃ　ここふく　ぢうろん男のおこと
ぢうろんでしゃ　そのぜんる　あまの
ぢうろんでしゃ　ここふく　ぢうろん男のおこと
ぢうろんでしゃ　そのぜんる　あまの
ぢうろんでしゃ　ここふく　ぢうろん男のおこと
ぢうろんでしゃ　そのぜんる　あまの
ぢうろんでしゃ　ここふく　ぢうろん男のおこと

せうしき
清浄あるべき天道さまを犯して
まこりてどこ
又き事をしでかしたらうサそれ
ア何処ぞ
ヤアきく「アノウまよ
男も跡を追ふてきてほしい
ちごのせ
ふ、よいたてつきてしまつて
ちんせもと
置てこ後の始末
ちんぷん
ぢよきの
ぢやまと
ぢやまと
ぢやまと

ぢうこゝろ
精ゐ潮もの
いで
お出ンござヨ私やアもツ
う
どうも解で送ッて世ろこだ
その
きく
そうへゐ又お金ゐを喰ッちやア
よ
まこと
アまこゝろ冥ろ
どこ
ぢく園ろこもできぢ
ちやうところ
礼ゐ彩ろ町処も
おもぐ
散賊せそ名宣と思
いきく
そ子母「十二私生ゐ

のぞみあるまいぞ痛ろうだらョきく
うまぢごくへんに電ごと思ッおもく
只てゐるうんぐ行ぢごくに落ちてゐる人ひとも
ありあ知ごくも穢土けがれたる所をしてさうろのふ
お前まへ何でも動くうごく何しろ
きっとまだ何か仕様しやうがあるそのぞ
きく「イゾそまア私やうまア支ぢきく
ろ乳ちちを飲のまでも


駿イハラ
唐阜

たろう　母「一ヲ九郎さまのふおくへ行
屋ごろ　ゐん
ーくろ　ゐん　母「三日ともつて経俵ざの
　ゐん　よもぎ　母「ハテ是も頭をぎる
ふ　母「ふうふ喧嘩の如
ぐんぐん今泣ぶ
をこ云ぶ　母「ハテ喧嘩
母狼が歌ぞ
きく「ヲヽ悔
ぎるお泊り子
母「ホヽヽおきく
でもひまさうぢ

おまへに逢
きつ
そふ
例の
ありまして
私が
ござ
ます
男「イヤ
ヨウ人今そこ
ヤ私が人の悪口
ふ
勝ま
ヤラ
ト
ヨキニ
師匠さん
ハヤ
来
ー
「イ
いつ
よく
子
ドヤア。アノ
何
薬
ヤ
ー
ト
ぎ
ぎ
ぎ

第十四　齣

こうだの
紀梅の
きーどる
房二帝
うち死
浪りも
こま
小
町
も
上
弐
る
て
古
風
そのまま
とぶらう孫の
ありそ上
異國生
けまうでん

くうてありもの
世ふせんこてまり
ありこまの風
ふくせんべうの製法
いまもちやうお菓のろく
でござる
松ふ砂文てきの
ありこまの
ふうりう花利
ありまし
ハイ
上ぐ
落ト
ござりまする
そのつぞ
ヲヽそれ
ハイ
ヲヽ
ハイ
ヲヽ
ハイ
ヲヽ

けんき　　ふおう　　まう　　ぎょう
繭玉そうそう。婦女の嬉
まくふ　　うらう　　ふう
又鳴もの賑うべし。繋の風
やぐ　　くづ
うら笛の砂煙を甫。結
ろう　　やぐ
あさうも。緒藤吉風あり
らのつ　　さん　　ひとおぎん
よ。でふざま。金線一枝もおもあ
ふさ　　いち　　まね　　さき
房一ぱい。いくそ輩。招歳前

お由き
お松つ
佐保姫の
あまも
けまひ哉


春の雪
源之子
龍山峡
房二帖

類書

本草

伊勢

春色連理梅巻之七畢